

学校名：横浜市立瀬谷中学校

氏名：吉田 友明

1. 今回の研修における目的やねらい

- ・今回はアフリカのタンザニアに訪問すること自体が大きな目的であった。開発途上国とされるタンザニアでの子どもの人権について考えること、大人・子どもを問わずタンザニア人の労働する姿の実態について見ることで、それらから教育のあり方について探究すること等を考えていた。
- ・アフリカの自然、そしてそこに暮らす人々の営みを自分の目で確かめ感じとること、体験で得たものを日本の生徒や先生に伝えられる素材として収集すること、をねらいとしていた。

2. 目的やねらいがどのくらい達成されたか

- ・途上国としてのタンザニアを直に体感できたことは、何にも変えられない大きな収穫であった。飛行機で 20 時間近くかけないと到達できない東アフリカに行く機会を得たことは、生涯忘れられないことである。
- ・訪問地での学校見学、そしてそこでの学校生活の様子、現地の先生との交流、そして生徒との交流等、タンザニアでの教育の一端ではあっても実情を自分の感覚で感じとり、理解できたことは、とても有益であった。
- ・現地で活躍する青年海外協力隊の姿が窺えたのも、感慨深かった。頑張る青年の姿に触発され、精神的な面でエネルギーを頂戴するような意味合いがあった。
- ・マセユ村で村人に直接インタビューする機会があり、そこに暮らす人と本音に近い部分での交流ができたのではないかと考えている。一般の旅行ではそのような機会はなかなか得られないが、JICA 関係の方々のご尽力によって、タンザニアの地元の人々と直接話げできたのは、替え難い体験であった。
- ・ILO（国際労働機関）によると、タンザニアの鉱山やコーヒー園・茶園での児童労働が指摘されている。そのような場面が本当にあるのか。移動の時間の問題もあるが、現地での実態把握や現実の姿を見られなかったのは、心残りな点である。また、国会議事堂、政府の諸機関の建物などの政治的な公共施設（中枢機関）が見られなかったのも、少々残念であった。

3. タンザニアから学んだこと

- ・この地球上には、様々な環境で暮らす人がいる。自分がどこで生まれてくるかは、変えられないことであるし、自分にはどうしようもできないことである。それはまさしく運命だから。誰しも、生まれた土地でのやり方、風習、慣習、文化の中で生きていくことになる。同じ地球に生きる人間として、全世界の人々が共生していける道を探りたい。ともに協力して生きていけるものであれば、それを大事にした人生を歩んでみたいと思う。タンザニアで出会った子ども、先生、地元の住民とのかかわりから、出生の運命的な環境について思い返す機会となった。今回、この地球で人類が共生していくことへの気持ちがより一層強くなったように思う。

4. 今回の研修経験をどのように教育活動に活用しようと思っているか

- ・タンザニアで出会った人々とかかわり、そこで見たもの、自分が経験したこと、現地に人から聞いたこと、そのすべてが教材になる。日本の人々（生徒、職場の同僚をはじめ、自分とかかわりのある人たち）に、機会をみて、開発途上のタンザニアの実情を伝えていくことが、経験を生かす

ことになると思う。それが、現在の日本をもう一度見直すことにもつながると思う。

・中学校社会科（公民的分野）の国際理解・国際協力に関する学習単元で、世界の子どもの現実と国際協力の活動に励む人々を取り上げて、学習展開を考える。とかく知識を教授することに力点が置かれがちな社会科の学習で、活きた現実的な素材を提示し、生徒が考え、自ら新たな考え方やものの見方ができるような学習を展開させたい。特に、中学3年生は高校受験を目前にしており、受験に必要な知識に偏りがちだが、そればかりでなく、世界を共生の視点で見ていく見方・考え方をもてるきっかけとしたい。

5. 今回の研修に参加してよかったことや、よりよくするための提案

・今回の滞在で、日本での生活経験のある JICA のフィリップさん、ドドマ大学で日本語を専攻しているサラさんのような、日本にゆかりのある（ある程度日本語ができる）現地の方との出会い、並びに支援は、とても有益に思う。フィリップさんには、現地での通訳はもちろんのこと、政治史の話（ニエレレ大統領から現在の政治情勢まで）や産業についての話（鉱山や農産物などの現状）を聴かせてもらったので、かなりタンザニアの実情を理解することができた。また、サラさんには中等学校での交流で、習字で「生徒に名前を書いてもらう活動」を行った時に、現地の生徒の名前を日本のひらがなに直してもらうことを支援してもらい、それがとてもありがたかった。また、お店での買い物の際に、交渉のやりとりで言語的な援助をしてもらい、現地でのコミュニケーションがとてもスムーズにできた。やはり、現地のある程度の日本通の方と共に行動できると、たいへん助かると思う。

・JICA の取り組みとしての O&OD について、日本では本当にそんなことができるのか、といったように半信半疑なところがあった。しかし、タンザニアで実際に携わっている JICA 職員からの話や、現地で活動する専門家の方の話と視察で、より鮮明に把握できた。繰り返しになっても、日本である程度の予備知識的なものを持ち、現地でのレクチャーと実際を見ることで、納得できる。この流れは、とても大事だと思う。

6. 海外研修での役割（日直や各担当）を振り返っての感想・提案など

・役割設定としては、今回のもので適切と思う。日直の役割で、訪問地での挨拶も日直が行うようなつもりでの理解でしたが、実際には団長・副団長が引き受けて行うような進行だった。日直を設けるにしても、その日の司会を行う程度のもので考えていてよいと思う。

・メーリングリストで、様々な情報提供が行われたが、何が提案事項で、何が決定事項なのかがよくわからない点があった。現地の隊員もはっきりと応えきれない面もあったと思うのですが、誰かの思惑なのか、それとも決定として進めるのか、特に交流の内容では、皆に相談なのか、そのようなものとして進めたいのか、理解しづらい点があった。各自がそれぞれの職場を持ち、それぞれの事情があつての研修参加ではありますが、大変でも「皆で集まって協議して決定する」といったことが、とても重要に感じた。参加者の顔を合わせたコミュニケーションが、何かをやり遂げる上でブレをなくせるように感じた。

7. その他、研修全般を通じての感想・意見など

・今回は、JICA の方々の周到的な準備の上に、様々な行程が生まれ、タンザニア現地での濃厚な 10 日間が実現できたと思う。その苦労と調整力に厚く感謝します。参加者は、それに便乗して活動することで、様々な情報や体験をすることができ、ありがたい限りです。“Thank you. Indeed.”

・ダルエスサラームでは、安全面の配慮もあってか、ホテル前と昼食場所くらいしか外に出る機会がありませんでした。贅沢な希望かもしれませんが、バスからの車窓観察だけでなく、街を散策す

る（日本人として目立たないような行動となるのでしょうか・・・）機会があれば、タンザニアの大都市の空気も感じる事ができたと思う。

8. 今後の本研修参加者へのアドバイスなど

【タンザニアへの研修の場合】

- ・タンザニアの学校での交流活動の準備は、大変でも皆で集まれる機会を作り、協議と練習を進められるとよいと思う。
- ・スワヒリ語の学習は、自己紹介ができるように（カンニングペーパーありでも）、しておく会更好。自己紹介が求められる機会があります。
- ・日本に戻った後に、どんな学習（単元）で進めようかをあらかじめ持っていないと、現地で教材となるものを見逃してしまう。自分の考えていることがそっくりそのまま見つからないとは思いますが、教材作りの構えをしておくことが大事に思う。
- ・時差があり、水が異なり、料理での油が異なり、言葉が異なり、習慣が違うところでの数日間。やはり健康と体力と気力があってこそ、現地生活を乗り切れるものです。健康を維持し、体力をつけておくことが充実した体験につながる秘訣です。健康第一！

9. 各訪問先等の所感

日時	テーマ	所感
8月11日(日) -12日(月)	日本からタンザニアまでの移動中および現地到着	20時間近くの交通移動は、実に長い。アフリカが日本から遠い大陸であることが実感される。
8月12日(月)	JICAタンザニア事務所表敬 研修ブリーフィング	マラリアの危険性を理解し、アフリカ人の衛生管理を危惧してしまう。逆に、日本の公衆衛生の進み具合に感謝。
8月12日(月)	本日の振り返り	ダルエスサラームに着き、皮膚の黒い人々をあちこちに見ることで、アフリカ上陸が実感される。タンザニアでの人種の違いを意識する。
8月13日(火)	JICAタンザニア事務所 研修ブリーフィング	O&ODの取り組みが紹介される。途上国支援にも様々な形があるが、地元に住む人々の合意のしくみを支援する援助のあり方を知る。効果が目に見える形でないだけに、その評価が難しい。
8月13日(火)	モロゴロへ移動	4時間20分くらいのバス移動。アフリカでは、これくらいの移動時間は当たり前なのかもしれないが、初アフリカに自分にとって、アフリカ大陸の広大さを感じさせられる。
8月13日(火)	本日の振り返り	携帯電話が、あまりにも多くの人々に利用されている実態を目にする。日本のような固定電話の普及を経験することなく、個の携帯へと移行していった情報社会の様相を目から感じとった。
8月14日(水)	Maseyu村 Mazizi地区 Maseyu村 Mjini地区 サイト視察	マセユ村のアフリカ流挨拶 OYEE! に驚く。やはり異文化の地に来たことを実感する。マジジ小学校への凸凹道に途上国の実態を体験する。田中専門家によれば、このような道でも中の上だとか。タンザニアの自然と共に生活する人々の様子の一端

		を理解した気がする。
8月14日(水)	専門家との懇談会	柿崎専門家の説明で、よりマセユ村での実態が理解できたと思う。モロゴロ県収入の5%が税収入ということで、まだまだ地場での産業が成長していないためといったところがある。大規模の農場、ビジネス、トラック資材運び等の通行料、市場での手数料が主なものだそうだが、一般の人々も負担し、地域住民のために税が使われるというような公共システムが財政の面で進んでいかないことには、公共サービスの進展も難しそうなどところである。
8月14日(水)	本日の振り返り	マセユ村の人々にとって、水くみが1日の大事な日課となっている。ライフラインの基盤の部分整備されないことには、生きていくための生活の苦勞が絶え間なく続くことと思う。
8月15日(木)	Maseyu 村 Mjini 地区 関係者インタビュー	ムジジ地区のひとつは、農業は自給自足の食のための手段であり、現金を使う場面はほとんど限られている。家で食べない農作物販売の収入が現金収入であり、洋服・交通費・携帯電話の通信費・子どもの教育費に支出される程度ということ。貨幣経済が普及している世界経済の現状とはいえ、マセユ村では、自給的な部分が多くあることが理解できた。
8月15日(木)	小学校視察、村人との交流	マセユ小学校では、すでに就学前教育(幼稚園)が行われているが、教室もなく過ごす状態に気の毒に思う。日本の教育がいかにか恵まれたものであるかが窺われる。村人たちも、陽気で、突然訪問の日本人とも親好的な関係をもててもらえたことに感謝したい。
8月15日(木)	市内視察(モロゴロ)	中心の市場には、多くの地元の人が集まっていた。子どもの働く姿(客が買った商品を入れる袋を200シリングで売る子ども、ビニール袋に入れた水をうる子ども)が見られた。ここでは、これが1つの流通のシステムとして根付いている感じがある。
8月15日(木)	隊員との懇談会	赤堀隊員は、2度目の青年海外協力隊であるという。1回目は生物の生態調査、2回目がタンザニアでの理数科教師。日本から遠く離れた地で、地球に住む人々の利益になる支援活動を行うことは、尊い活動であると思う。その精神を日本の子どもたちにも伝えたい。
8月15日(木)	本日の振り返り	スーパーマーケット店の前で、お金を貰おうとする子どもがいた。地元の女性が紙幣を1枚(おそ

		らく 500 シリング) 渡していたが、ここではよくある光景なのかと。赤堀隊員の話では、目の不自由な人がこのスーパーの前で物乞いをしているという。また、路上には浮浪者社のような人が3人ほど見られ、これも途上国であり自由主義である国の一面なのかと思う。
8月16日(金)	ムグラシ中等学校 赤堀隊員	ムグラシの生徒は、気さくで、日本の同世代の子どもと同じような感じであった。スタッフルームの前に「No English No Service」の張り紙があり、公用語の英語を身につけさせる取り組みが表れていた。そして、学ぶ姿勢をきっちりやらせようとするムグラシ教員側の姿勢も窺えた。 スポーツタイムで何人かの生徒とキャッチボールとハンドベースボールのような活動ができて、少々満足。キャッチボールの際に、タンザニア人は手が長いことに気づいた。一緒に活動した当人は気づかないだろうが、野球のまねごとができたことは嬉しかった。
8月16日(金)	ミクミ国立公園通過 モロゴロへ移動	野生のキリン、ゾウ、シマウマ、インパラが間近で見られたことに感激。日本では動物園でしかお目見えできないものが、大自然の中で生きている様子を観察できて、アフリカに来たんだ！と実感できたひと時であった。
8月16日(金)	本日の振り返り	紙を使わないトイレ、これがタンザニアスタイル。アジア等でも水道が普及していない地域にはあることだが、このスタイルと食べるときに左手を使わない習慣と関係がありそうだ。汚れた手と衛生とが習慣的に分けられているように思う。 ムグラシでの先生の体罰も上下関係を保とうとする教師側の姿勢の表れであろう。かつての日本もそうであったが、相談(カウンセリング)の考えが導入されるとその意識も変わってくるかと思われる。
8月17日(土)	バガモヨへ移動	バス移動での途中の集落で、バスが止まると一斉に物売りがバスの窓越しに表れた。少しでもかせごうとする途上国ならではの光景ではなかろうか。裏返せば、そういったことをしなければ収入が得られない実情にもあるのかと思う。その中に、豆を売る少年2名を見た。子どもも労働力として家計を支える存在となっているのであろう。
8月17日(土)	市内視察(バガモヨ)	奴隷博物館では、やはり衝撃的だった。残された建物としては、さほど思うところはなかったが、人間が商品として売りとばされていた事実、その

		売られていく最後の現場にいたことに感慨深さを感じた。
8月17日(土)	本日の振り返り	加藤隊員は、中学校時代あまり学校に行かず、高校に入る時に先生に大変苦勞をかけたという。そういった若者が、現在、遠く日本を離れた地で JICA 海外協力隊員（測量士）として活動していることに、感銘を受けた。中学生の進路を担当する3年担任として、生徒に将来的な道を作ってあげることの責務を痛感する。中学校で充実した生活が営めなくとも、やがて志を持ち、このような海外協力隊員として活躍できる将来像があることを再認識した。
8月18日(日)	ダルエスサラームに移動	バガモヨからダルエスサラームに移動の幹線道路で、日本の援助による舗装が行われているところを通過。他の幹線道路と比べて、これといった違いは感じられなかったが、日本の技術が活かされていることで、日本の援助の大きさを痛感する。また日本の中古車と思われるマイクロバスが、かつての掲載文字がそのまま運行されている。バス会社によっては、塗り直しているが、元の日本の文字を消そうとしないのはなぜなのだろうか。
8月18日(日)	教材等購入	ティンガティンガ村で絵の購入。ティンガティンガ独特のタッチで描かれているが、売り場にいる若い画家は自分の描いた絵を売ろうとアプローチしてくる。売れた絵によって、そのマージンがガが本人に入ってくるしくみのようだ。
8月18日(日)	本日の振り返り	日本の ODA の経緯について、かつて 1960 年代のアジアへの賠償保障的な開発援助から、70 年代のビジネス傾向、80 年代の NGO による批判傾向、90 年代からは透明性を重視して、支援金が決まってくる傾向にあることを理解した。
8月19日(月)	キパンランガンダ中等学校 米澤隊員	ミナガワ校長の人柄に感激する。特に、最後の別れの際に“Thank You. indeed”と喋って握手してくれた時の対応は、忘れられない。人に感謝を伝えるのは、こういった言い方で行うものだという手本のようなものを感じた。 米澤隊員の落ち着いた感じでの授業は、素晴らしい。低学力の中等教育学校であるようだが、先生の情熱と教育方法の工夫で、質の高いものとなっていくことを願う。
8月19日(月)	教材等購入	Kamata-shoprite で、買い物。タンザニアは、コーヒー、茶の産地でもあるので、それらを購入。日本の先生や生徒に、本場の味を届けたい。

8月19日(月)	本日の振り返り	キパンランガンダ中等学校では、電気ケーブル線が、つい10日くらい前に通ったという。これから学校も電気施設が整っていくのだろう。しかし、設備が整うのはいつになるのだろうか。予算の関係ですべて進むのであろうから。
8月20日(火)	JICA タンザニア事務所 報告会	私からは、アフリカでの独特のコミュニケーションの取り方、働く子どもの姿からタンザニアでの子どもの人権を考えることについて報告。タンザニアでの法的な面からの追究をもっと考えていきたい。
8月20日(火)	在タンザニア日本大使館 表敬訪問	タンザニアでは、政府の試験のためほとんどが高校には入れない。また経済的な面から教育にお金をかける家庭も多くはないことを聞く。初等教育の普及はどんどん広まっているようだが、企業で働く中堅層になるような人材育成の必要に迫られている。このことが、タンザニアに課題となっていることを理解する。
8月20日(火) -21日(水)	タンザニアから日本までの 移動中および日本到着	初めてのアフリカ。多くの体験と新たな知識を得たが、日本食に恋しくなっていたのも事実である。カタール航空での機内サービスで「42 世界を動かした男」の黒人差別を克服した野球選手の映画に感激する。アフリカが黒人が多く住む地域だっただけに、人種差別を乗り越えていくストーリーに感慨深いものを感じた。